

陀あるのみで、常に純人間的な形の唯一つの像が、終始到る處で、現身の佛を現はすにも、法身の佛を現はすにも用ひられたからである。

初めに此の點が立證せらるれば、こゝでの考察が成果をうる爲に、之が重要な事は容易に認められる所であり、又、直ちに此の問題がどういふ點に約められるかも判ぜられる。極東のあらゆる寺塔にある、今日では座像になつてゐる無數の佛像は、一の共通な原型から出てゐるとすれば、此の原型を求めらるるには、其の見本を猶遺つてゐる最も古い像に、出来るだけ近く溯つて見れば足りるのであらう。印度考古學の現状から、之を語る事は容易であり、兎も角、考究は其の極限まで達し得る。要するに、今日に知られてゐる最初の佛像は、印度の西北犍陀羅、今のペシヤワール Peshawār 地方の發掘で得たものなのである。事實の問題である此の結論は、日本では殆んど動搖を惹起す程の事はないが、印度では、一應尤もな駁論が色々起つたのである。此の佛像の原型をば、佛陀の活動舞臺を遠く離れ、今日では殆んど悉く回教徒である地方で發見し、又之は、佛入滅後五世紀を経て漸く見るのであり、且つ、